

片岡良一

『虞美人草』の世界

『虞美人草』の世界

『虞美人草』は明治四十年の六月二十三日から十月二十九日まで、東西の朝日新聞に連載された。作者の朝日入社後最初の長篇小説である。「彼の朝日入社は世間の耳目を聳動させて、この作の人気はすばらしく、玉宝堂では虞美人草指環を作り出す、三越呉服店では虞美人草浴衣を売出す、駅の新聞売子は漱石の『虞美人草』と云って朝日新聞の触れ売りさえした」と小宮豊隆が伝えている。そういう人気にふさわしく、これはいかにも意気

ごんだ絢爛たる出来ばえの作品になっている。『猫』『坊
つちやん』『草枕』などとともに、彼の作品中でも殊に
広く読まれたものの一つであった。

やはり豊隆その他が書いている通り、この作の意図は、
篇末に示された甲野さんの悲劇論によって、極めて明瞭
である。「業」とか「我執」とかいうものがよき「人間
的本質」を曇らせているのが、人間現実生活の常態だが、
それが一旦「生か死か」の悲劇にぶつかった時には、「ま
こと」と「道義」のよき本質がよみがえって、道義の貫
通した世界が成立しずにはいないというのである。これ

に似た考え方から、「業」とか「原罪」とか「私」とか「我執」とかいうものを断滅して「天」に則ろうとするのが晩年のこの作者の全努力を傾けた追求になったのだから、いわば作者の生涯をかけたテーマが、まずこの作にその露頭を示しはじめたということになるのである。前作『野分』から見ての新しい主題的展開がそこにあった。

が、晩年の「則天去私」などについては、ここにはいわない。以上のように見て来た場合、この『虞美人草』に描かれたものは、作者の人間と人生とに対する肯定観

につらぬかれた、明るい世界だと云わねばならない。「生か死か」の問題にぶつかって、その本質によみがえった人間が、「人生の第一義は道義にありとの命題を脳裏に樹立」し、「道義の運行が渋滞せざる」に到るというのは、人間各自のうちにそうした石火の機縁に応ずるものの内包されているのであることを、固く信ずる場合にのみいえることであろう。保津川下りの甲野さんの言葉を借りれば、第一義の御手本は人間内部にあることになるのである。そういう本質において人間を肯定し、そうした本質の実現の可能を信じているのである限り、これは

明かに人間と人生とをそのよき可能性において肯定した、言葉の正しい意味で喜劇的精神の貫流した世界だといわざるを得ないのである。

『猫』であれほどの暗い心象を示していた漱石が、こういう明るい肯定観に浮び上って来たのは、一つにはやはり時勢の反映であったのであろう。日露戦後の社会状況が——その近代的整備が、それにともなう自己実現の可能性を思わせる気もちを、当時の人々の間に或る程度一般化した。それに対する否定的条件の累積が、そういう自己実現の道を望んで擡頭した自然主義文学一般を、

明治四十年の声を聞いた頃には、早くも重苦しく梗塞しはじめつつあったにもかかわらず、なお残されていたそういう空気の一面が、岩野泡鳴のようなガムシヤラな新進作家をも登場させた。漱石もまたそういう時代の表層的気運に動かされて、強い自己主張とその可能性を思う気もちとに傾かざるを得なかったのだと思う。

と同時に、それはまた一方からいえば彼が、朝日新聞に専属して、それまでの幾らか余技的であったのとはちがった、生命がけの作家的出発をするようになった、そういうところから来た熱意や責任感が、いわゆる「米の

飯」の第一義的創作を志させて、こういう積極的な主張を盛りこんだ作品を、力一ぱい試みさせることにもなったのであろうと思う。誰かが書いていた通り、その意味で『虞美人草』は作者がむきになった処女作のようなものであったのであり、それだけにまた彼としての本質的な主張が正直に露呈されたのである。

のみならず、『猫』の苦渋から出発した漱石は、その苦渋にふさわしく、『幻影の盾』などにおいては、その主張の現実的な可能を信ずることなど、とうてい出来そうもないものと思っっている気もちを示していたのであつ

たが、その後の『琴のそら音』や『趣味の遺伝』を経て来る間に、必ずしもそうではなく、現実的にもその夢即ち主張実現の可能性もありそうに思うようになって来たのである。かたちが、歴々と指摘されるのである。その気もちの延長が、転換期的な時代気運ととけ合ったことが、『坊つちやん』からこの『虞美人草』にかけての作者の態度の積極主義化を、必至としたとも見られるのである。そういう転機に立つものであった『坊つちやん』などの社会的成功が、その必然をさらにあおらなかつたともいえぬかも知れないと思う。

とにかくそういう要因のさまざまが、この作に示されたように、作者を明るく緊張させて、人間に対する信頼とその上にある人生の道義的可能を信ずる気もちとを、揮灑させずにはおかなかつたのである。その意味でこれは初期時代の漱石をしめくくるべき一つの頂点であった。鬱屈していたものが明るくとけたのであり、『幻影の盾』などでは夢として語られていたものが、その現実的可能を実証されたのである。

が、それにもかかわらず作者は、この作の世界を、正しい意味での喜劇的精神の貫流するところとして、描き

上げることは出来なかった。むしろ逆に、これを悲劇論などで要約せねばならなかった。そこに明かに作者の心境と思惟との混乱があったことになろう。

当面の悲劇論を見たまえ、それはすでに見て来た通りその根本において人間の本質ないしそこから来る可能性への信頼の上にあるものだった。にもかかわらず、それはその前半に、そうした信頼を否定する甲野さんの無力感を、強く打出したものになっているのである。

悲劇は遂に来た。来るべき悲劇はとうから予想して居た。予想した悲劇を、為すが儘の発展に任せて、隻

手をだに下さぬは、業深き人の所為に對して、隻手の無能なるを知るが故である。

こういう悲劇論の書出しが、甲野さんの無力感を端的に示すものであることは、もとよりいうまでもあるまい。

「隻手を挙げれば隻手を失ひ、一目を揺かせば一目を眇す。手と目とを害うて、しかも第二者の業は依然として変らぬ。のみか時々刻々に深くなる。」こういう無力感が甲野さんを淋しく悲痛な生活気分と消極的な生活態度とに落ちこませていたのである。それを必至とする人間と社会とである以上、悲劇もまた必至だというのが、

ここで漱石のいおうとしたことであつた。

これは初期漱石の心境を理解するには絶対に見落してはならぬものであつた。『猫』以来の漱石は決して彼自身の生の目標を——人生におけるよきものや高いものを見失つていたのでなかつた。にもかかわらず、彼がともすれば虚無的とも見える絶望感に傾こうとしたのは、主としてこの無力感によるものだつた。そういうものを受けつけようとする人間一般ではないではないか、強いて受けつけさせようとするれば、かえつてこちらが傷つくだけではないか、そう考えた彼であつたからこそ、空い

く「隻手を失」うことや「一目を眇」することを怖れたのであろう。そこに明かに漱石における衆愚意識と、そこから来る啓蒙の不可能を思う気もちとがあつたことにならう。そういう意識があつたからこそ、彼は人間一般の営む日常生活を、彼自身の言葉でいう喜劇——言葉の正しい意味ではむしろ茶番視したり、世の中全体をそういう意味での「喜劇ばかり流行る」ところと、侮蔑的否定的に規定したりすることも出来たのである。

こういう無力感も、一方からいえばやはり明かに時代的なものの照りかえしであつた。先に見て来た通り、日

露戦後の社会状勢が多くの人々に自己実現の可能性を信じさせて、積極的な踏出しを示させたのでありながら——或はそうして積極的に踏出させたが故に、その前に立ちほだかる梗塞の壁の厚さを、痛感させずにはおかなかった明治四十年のことである。ブルジョアジイの新しい発展の可能性の乏しいことも、ようやくはつきりと意識されはじめずにはいなかった時代だった。そういう時代の反映が、こういう無力感を生ませずにはおかなかったのである。と同時に、『猫』を書いていた頃の漱石は、そういう無力感を、一面彼自身への自己批判とのつなが

りにおいて感じていたのであった。苦沙彌先生の扱い方や、明治三十九年二月十四日の森田草平あての手紙の中で、「天下に己以外のものを信賴するより果敢なきはあらず、而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいのか。森田君 君此問題を考へたことがありますか。」と書いていることなどによつて、そのことは明瞭に知ることが出来る。自らよしとし高しとするものの暢達と実現とを阻んでしまふものが、彼自身の内部にもあることを、鋭く意識していた漱石の悲痛な苦惱である。主としては客觀的条件からの照りかえしであるものを、

もっぱら主体内部の問題としてのみ苦悩していた漱石のすがたが、そこに認められたのである。戯作的な笑いにとぼけようとした『猫』に、深刻で悲痛なかげがあつた所以である。

ところが、この『虞美人草』の甲野さんの場合には、そういう漱石が持っていた自意識などが全く影さしていないのである。だから彼は、この作に描かれているほど悲しく沈んだ思索人なのでありながら、そういう自意識から来る疑惑や苦悩や自己省察などは少しも持たない、常に周囲に対する優越意識を生き通して、「驚くうちは

楽しみがある。女は仕合せなものだ。」などという、意地悪く侮蔑的な言葉を冷然と口にすることも出来る人間になっっているのである。つまり、この作の場合には、明るく調和的な人間生活に対する否定的要素であるところの、「業」とか「我執」とかいうものへの追求が、作者自身をもこめた人間一般の問題としてなされるかわりに、藤尾なりその母なりという特定の人間だけの問題として、従ってもっぱらきびしくそういう人間たちを裁こうとするだけの意識をもって、なされているのである。それがこの作を、作者自身の求道的情熱の上にある、第

一義の純文学であらせるとは、他を裁き或は教えよ
うとするだけの啓蒙的情熱に上釣った、通俗的作為の物
語にしてしまったのであると同時に、『坊つちやん』以
来のこの作者を特徴づけた姿勢が、そこにいよいよはつ
きりと認められることにもなったのである。それを衆愚
意識の上に立った優越意識ないしは指導者意識のあらわ
れといつても、人間否定にも連なりかねない怒りの発現
といつてもよからう。豊隆への手紙によれば、作者はは
じめから藤尾を殺すつもりであったという。彼女と一し
よに道を求めるのではなく、自分の信ずる道のために、

邪魔になるいやな奴などこの世から抹殺してしまおうとせずにはいられぬほどの、はげしい怒りである。人間をおもちやのように操って、善玉悪玉の対立する通俗世界を作為することなど、そうした心境からいえばもとより極めて容易な——むしろ必然的なことであつたらう。

しかも、そういう悪玉は人間の力をもつてどうすることも出来ず、従つて悲劇的な破局は必至だというのが、『虞美人草』に示された漱石の感懐の一面だつた。そうして殺すよりほか仕方がないとか、死ななきやなおらないとかいうのは、すでに見て来た人間におけるよき道義

的可能性への信仰とは、明かに矛盾するものではないか。その意味で漱石の悲劇論は明白な矛盾の上にあるものだったのであり、それを必至としたものが、当時の漱石における人間への信頼と、道を愛するが故に人間を憎まずにはいられなかった気もちとの、はっきりした分裂にあったのである。人間のために道を求める文学者の苦惱ではなくて、道のために人間を裁く道学者の怒りが、それを必至としたともいえよう。

ところで、そういう分裂した作者の心境を合理化しようとしたものが、すでに見て来た通りの「人間的本質」

と「業」ないし「我執」との対立であったわけだが、それが観念的には極めてみごとな設定であるにしても、現実的には極めて整理されない混沌の多くを孕んでいるものでしかなかったことは、『虞美人草』そのものが明示していよう。小野さんが藤尾にひかれるのは「私」或は「業」で、小夜子に帰るのは「私」でも「業」でもないとしている場合の作者は、生命の第一義的な燃焼である恋愛を否定して、心にもない義理に生きるのが「道」だといおうとしているのであることが、明瞭だろう。そのくせ宗近さんや甲野さんが生の第一義を生きようと志向

しているのは立派なものと見て、彼等が保津川の激流と肝胆相照らすことなどには、満腔の共感を惜しまぬ作者なのである。そういう作者が、第一義の眞実はすべて押し殺して、肝胆の外廓にばかり生きる「謎の女」を猛烈に非難するのは、もとより正しく筋が通っているけれども、好きでもないどころかそのじめじめした生き方の故に嫌悪をさえ感じている小夜子と、道義故に無理に小野さんを結びつけて得たりとしているのは、どういうことになるのだらう。そういう形式的道義の強圧が、心の眞実を忘れた肝胆の外廓人種をも生むのではないか。小野

さんの恋愛を非難して「義理」に生きること強要する道学者には、だから藤尾の母を憤る権利はないはず——どころか「謎の女」の生態に自ら責任を負わねばならぬはずなのである。これはほんの一端だけのものだが、その一端を見ただけでも、『虞美人草』の世界が思想的には片づかぬ混沌の上にあるものであることが、明瞭だろうと思う。それを「本質」とか「業」とかいう言葉でつじ棲を合せたにしたらところで、それは要するに言葉だけの、いわゆる観念的な整理でしかないのである。だからそこで明瞭になるものは、第一義を追うて直下に生命の

燃焼を生きることには高い価値を見ようとする近代人漱石が、恋愛よりもむしろ義理その他の封建的道義を尊重するということ、意外な矛盾を矛盾とも思わずに持っていたということだけであろう。そういう封建的なるものへの好みに強くひかれていた漱石であつたからこそ、彼の愛する女性は、はっきりした自我もなければ積極的な生の目標もなく、男が結婚などするなといえはそんなものかと思ひこもうとするだけの、いわゆるすなおさにも生きず糸子や、漠然とした男への期待に生きて、いつまでも侘しげに待ち続ける小夜子のような人たちでしかなかつ

たのである。そういう好みが、京人形や都おどりを或る意味では第一義だとする観察などとも結びつく。強く積極的に生きようとする藤尾が、殺すよりほか仕方のない「我執の女」としてしか映らぬのも、これでは止むを得ぬことになる。保津川の激湍に第一義の壮快を感ずる激情が、そんな女など殺してしまえ、そんな人間にとつて悲劇は必然なのだと思えるほどの強い我執に転化しているのであることを、甲野さんが鋭く反省せずにはいられなくなるほどの自照性がこの作にあつたら、上記のよくな作者の整理されない心境的矛盾こそが、直接的に甲

野さんの無力感と結びつくべきものであることなども、すぐに明瞭になったのではないかと思う。小野さんの恋愛を非難するものには「謎の女」を憤る権利がないのだとすれば、そこに当然その主張に徹しきれぬものの無力さが覩じられるわけではないか。甲野さんの無力感はだから当然その内部的な矛盾に胚胎したものでなければならなかったのである。しかも、先に述べた範囲でも明瞭な通り、そういう甲野さんの心境的矛盾は、むしろ彼の内部にあるだけのものではなく、そういう心象分裂を必至とした外社会の条件にもつながるものであった。つま

り市民的道義の確立を阻んでいた絶対主義治下の封建的
残滓の問題である。だから問題は、自己実現の可能を思
う気もちと、社会的梗塞故にそれの不可能を思うところ
から来た無力感との、矛盾の中に含まれていたのだとい
うことにもなる。すでに見て来た悲劇論の含んでいた矛
盾にこそ、だからつまりはこの作の根本問題があったこ
とになるのである。甲野さんがその「隻手の無能なるを」
痛嘆せずにはいられぬほど——それ故に悲劇は必至だと
観じずにはいられぬほど、啓蒙の可能性さえない人間一
般であつたら、どうして悲劇にぶつかった瞬間に明るい

可能性が生れるなどの奇蹟があり得よう。もしまたそのめでたい可能性を信ずるのが正しいとしたら、問題は当然「隻手の無能なるを」嘆ずる甲野さんの独善的な生き方の上に、撥ねかえらねばならぬはずなのである。自己実現の可能性を思つて勇躍する気もちの奥に、その不能を思つて萎縮したがる気もちのかげろいがある、その心境的分裂の由来を追求するのである。『猫』には明かにそういう点への自意識があつて、それがあの作の世界を苦渋に充ちたものにしていたのに、この『虞美人草』の場合には、そういう自己追求の苦悩の影もないほど、

作者が明るく上を向いてしまっていたからこそ、淋しく沈んだ人間として造型しようとした甲野さんが、陰性の優越意識に安住した、意地悪くキザな、ニュアンスの乏しい人間ともならざるを得なかったのである。

このことは、また一方からいえば、文学は作者自身の新しい生の道を求めるためのものではあっても、わかりきった道をひとのために説くものではないのだという近代文学的自覚が、まだ漱石のものになっていなかったのであることをも、端的に反映する事実になっていたのであった。初期時代の漱石は、彼自身の一つ一つの作品に

ついて、よく「これは自分の一面だ」というようなことをいっていた。彼自身として、全身的にのめりこまずにはいられぬ問題の鉤脈にまだぶつからぬままに、ふとした触発や持合せのセオリーを、それに周到全円的な検討を加えることもなく、一面的なままに拡大したり強調したりして、美しく華やかな物語の数々を示していた彼のです。すがたが、そんな言葉の中にも髣髴されるのではないか。要するに彼自身の道を求めずにはいられぬ第一義の近代作家的探求からはまだ遠いところで、一面的な主張や好みを振りまわしていた初期時代の漱石だったのである。

作家としてようやく本腰を入れはじめたために、後年その命をかけた主題となったものにも触れかけながら、それを彼自身の問題として追求しきろうとする沈潜に向うかわりに、美しく華やかな啓蒙的物語を作り上げてしまった『虞美人草』には、そういう初期時代の彼らしいものが、まだまだ色濃く示されていたのである。自分の生の道を求めて、未知の世界にその探求の手をのばして行くこうとする作家であるかわりに、作者は彼自身にとっては自明と思われる真理を効果的に語ろうとするだけの、語り手でしかまだなかったのである。そのことが、

すでに見て来た通り『猫』には明かに投影していた作者の奥深い心象を、この作では完全に切り棄たような、一面的に片づいたお話を作らせてしまったのである。そう思うと、この作に示された作者の技術が、一応はそのすばらしい強力さや豊かな美しさを讃えられねばならぬものであっても、性格的には旧めかしく通俗的な、物語的作為のそれではかあり得なかつた必然も、容易に理解されることになろう。より早い頃の『一夜』に、「これは人生を書いたもので小説ではない」などと、わざわざ断り書きしていた漱石の小説意識は、その言葉そのものが

明示している通り、結局旧めかしい作為主義のそれでは
かなかったのであり、それだけ派手な対比とそれによる
強調などを軸としたものにならざるを得なかったのでは
ある。そういう対比や強調のための人間の一面化や傀儡化
が、作品の世界をかえって浅く傾向的なものにしてしま
ったのも、是非ない必然であったわけであろう。そうい
う初期時代の旧めかしい小説意識やそれと呼応した美文
意識が、最も凝集的に表現された長篇小説として、『虞
美人草』は正にそういう面での漱石を代表する作品にな
っているのだけれども、そこにそれまでの作品に示され

たものの集大成を見ることが出来る以上に、新しく伸びて行こうとするものの芽は、あまり見出せないのである。後になるほど作家としての正しい態度に沈潜して行つた作者自身が、後年にはこの作に対して或る恥しさを感じなくなるようになったのであることなども、当然ここらで思い出されるわけであろうと思う。

だが、そういつても、この作が、通俗的な啓蒙の作品としては、そこに上記のような思想的混乱はあるにしても、全体として作者の健康な情熱と積極的な意欲とにつらぬかれた、迫力を持つものになつているのであること

も、また否定出来ない。と同時に、こういう作品を、すでに自己実現の可能性が見失われはじめた時期に、自然主義一般の後退的な姿勢などにさからったかたちで、作者が強く押出して来たことには、そういう後退を必至としたほどの社会状勢に対する、強い抵抗が認められてもよいことになる。それはむしろ一方からいえば、そういう時勢的な風潮から浮上り過ぎた、浪漫主義者漱石の観念性を示すものであったに相違ないが、それなりにまた、そうした観念性に浮上るまでもその主張を棄てなかった漱石の抵抗の強さを、感じさせるものでもあったの

である。そういう積極性と健康さがあったからこそ、この作が当時多くの人々に強く喝采されたのもあると思う。そういうところに、一見昏いようでも、実際は常に高く正しいものに連なろうとしている民衆一般の、明るくよき可能性が見出されるのである。そういうものにも触れかけて、それ故にその悲劇論の結末にも示されていた通りの、明るい肯定観に連なりそうなものをも示していないながら、それを正しく周延することによって、ほんとに逞しく肯定的な喜劇論を成就するかわりに、あるが如き悲劇論に低迷せざるを得なかったのは、すでに見

て来た通りのその世界の未整理と問題の核心に正しく迫りそこぬた探求力の限界——というより、この作の場合にはむしろまだそれほどの探求意欲がなかつたこととに、由来したものであつたに相違ないとともに、それが一面にはまたそれを必至としたほどの時代的梗塞の重さに由来するものであつたことをも、感じさせずには置かぬわけであろう。そういう重苦しく打破り難い梗塞に力一ぱい抵抗しようとしたものとすれば、この作にもまた一つの高い価値が見出されてもいいのではないかと思う。その抵抗の見通しの悲しさを標象したような甲野さ

んの生き方には、そのあまりにも著しい自照性の乏しさの故に、ともすれば反撥や反感を感じさせるようなものがあっても、それに対置された宗近さんの生き方などにも、それがかなり安易に過ぎたかたちのものであるにしても、そういう困難な状況下に一応は正しくしかも悠々と生きているもののすがたを、よく造形し得ているといえるのではないか。それは明治の文学史としても、最も楽しくおおらかに成就された人間像の一つとして、注意されてもいいものになっっているのではないかと思う。少くとも彼や彼の周囲の人々に対する場合には、藤

尾やその母に対する場合とはちがって、作者の傾情的な深い愛が注がれており、それがこの『虞美人草』という作品の世界に、一種ほのぼのとした楽しさの感触を持たせることになっているのは、否定すべくもないところであろうと思う。それは作者の女性への好みなどとも通い合うところのある——従って根底的にはやはり或る批判を必要とする境地なのではあるけれども、それだけにまたそこに、作者の理想とした人間生活のすがた（相）が、認められてもよかったのである。そういう境地をこの作が示したほどにまでこの作者に尊ませたところに、鬱屈

の重苦しさが処置し難くおおいかぶさっていた時勢であったことも、端的に感じられるわけではないかと思う。そういう時勢的な圧力の下で、猫の鬱屈からは身をひるがえしながら、漱石はやはりそういう生き方にその夢を托さずにはいられなかつたほど、自由に且つおおらかに息づきたがっている彼自身を、示さずにはいなかつたのである。

（昭和二十五年五月
春陽堂文庫 解説）

日本文学電子図書館

夏目漱石の作品

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

出版社：鷺の宮書店

昭和42年12月15日 印刷

昭和42年12月20日 発行

日本文学電子図書館